



JA青年の主張

第5回

新規就農への道 ～秘伝「親方就農」～



秋田県・JA あきた北青年部
石垣農園株式会社 営農部長 谷本 弾

「たんぽできたよー。たくさん食べれー」。

祖母の声がリビングに響き渡る。祖母が作ったあつあつの比内地鶏のスープが染み込んだりたんぽ鍋を親戚みんなで囲った。

東京都町田市出身の私は幼い頃から長期休みがあると、母の故郷である秋田県大館市を訪れた。

秋田犬はとても可愛い。兄弟・従兄弟たちと豊かな自然の中で遊べて楽しい。きりたんぽをはじめとする大館のごはんはおいしい。私にとって大館は魅力に溢れていた。

「ずっと大館にいたいなー」。いつからかそう思うようになった。

大学生になり、研究室で日本の人口問題について調べた。なんと秋田県が人口減少率が全国ワースト1位。出生率は全国最下位クラスに低く、高齢化による死亡者数の増加、若年層の進学や就職を機に県外に移住する人が多いのも原因だ。

増田寛也氏の著書『地方消滅』によると、日本の約1,700ある自治体のうち896の自治体が2040年までに消滅する可能性が高い『消滅可能性都市』と言われていた。秋田県は25市町村のうち24市町村が消滅可能性都市に指定された。その中でも消滅可能性都市を免れていた唯一の自治

体があった。その名は『大潟村』だ。

大潟村は大規模農業の推進や近代的な農業技術の導入を目的としたモデル農村として1964年に発足した。日本で2番目に大きい湖である八郎潟を干拓してきた農地の面積は約1万ha。大潟村で革新的な農業をしたいという若者が全国から移住してきた。

平坦で広い農地や豊富な水源などの恵まれた環境、全国から選ばれた意欲的な農家によって生み出された大潟村独自の販売方法によって磐石な農業経営を築いてきた。

大館市も大潟村のように農業で稼げることを世間の人に知って貰えたら、大館で農業がしたいという移住者が増える可能性がある。さらに農家の減少にも歯止めをかけ、農地維持にも効果を発揮し、地域の活性化にもつながるかもしれない。

だったら、私自身が実際に移住して農業をやってみよう。大学を卒業後、2年間埼玉県の農業法人で研修を受けて、2020年春、母の故郷の秋田県大館市に移住した。

母の弟（叔父）に1人の農家さんを紹介してもらった。通称「親方」。

親方はもともと梨とリンゴを栽培する果樹農家だが、周りの農家の高齢化・減少に伴って水稻に参入し面積を拡充している。これからもっと耕作者が減ることを見越して、さらなる面積を担うために小さい田んぼ同士を合体させて、効率の良い田んぼを作る区画整備を計画している。

他にも様々な話をしていると、親方は私がめざしている地域のために農業をしている方なんだと確信し、親方のもとで農業の勉強をさせて貰いたいとお願いをしてお世話になることになった。

私の大館農業ライフが始まった。初めての米作り。埼玉で野菜を中心勉強をしていたため、すべての作業が新鮮だった。

日本人の主食は米なのに、米の育ち方や作業工程をまったく知らなくて恥ずかしさも覚えた。野菜と比べて、機械の数、生産規模、米の生産にかかる人数の多さに驚嘆した。

田植えまでに播種、畔塗り、耕起、代掻きと4つの主な作業があるが、床土作り、苗の育苗、堰上げ、水管理など一般人には知り得ない多くの裏方作業もあった。特に水をすべての田んぼへ潤沢に行き渡らせるには、村人と協力して、水路周りの草刈りや泥上げを入念に行わなければならない。大面積の農地を担うには多くの人の協力が必要だということを学んだ。

いよいよ田植えが始まり、親方は1年目の私に田植え機のオペレーターを任せてくれた。親方から丁寧に教わるも、実際にやってみるとなかなか難しい。四角じゃない田んぼは特に真っ直ぐに植えることが困難だった。

「近くばかり見ると曲がるから、遠くに目標を決めて真っ直ぐ進んでみれ」

親方からアドバイスをいただきながら、丁寧に田植えを進めていった。約1か月に及ぶ初めての田植えが終わり、達成感とこれから稻はどのように生育していくのか、どんな作業が待っているのか高揚感に駆られた。

「よーし、飲みに行くぞ！」

親方に誘われ、田植えの労いの会『さなぶり』に参加した。そこには親方の田植えに携わった方たちに加え、地元の農協の職員と農協青年部という大館市中の若い農家がいた。親方も農協青年部で数年前まで秋田県の青年部の委員長まで務めたそうだ。みんな若くて勢いがあって、農業談義に火が点いていく。

農協青年部では視察や講師を招いて勉強会をしたり、地元産品の販促活動、食育活動などを主軸に活動している。農業の勉強をするだけではなく、地元の農業を盛り上げるために活動ができる。まさに地域活性化につながる。

私は即青年部の一員となった。

暑く長い夏の間はひたすら草刈りに専念した。

稻が伸びるスピードと同じくして畔の草も伸びる。まるで自分の子孫を残すために命をかけて競い合っているようにも見えた。

しかし、われわれ農家も生きるために雑草を退治しなくてはならない。

命の上に命があるということを身に噛み締めながら、刈払い機を振りかざした。

そしてついに季節は秋へ。

親方の経営は梨、リンゴ、米と一緒に収穫になる。まさに実りの秋。黄金の穂を実らせた稻がゆらゆらと風に揺れている姿は絶景だった。

コンバインで簡単に刈り取られ、乾燥、脱穀、袋詰めの作業をして米作りの全行程が終了した。

約半年かけて作った初めての新米。香り、味、水分量が全然違う。今まで食べててきたお米と比べて別格においしい。

そんな新米に感動している私に親方がふと、

「農業ってのは天候や市場によく左右される。プロの農家はどんな状況でも良いものを作って、中長期的に戦略を練って経営維持しなければならない」

2020年は、ちょうど新型コロナウイルスが流行り始めた年だった。飲食店にお客さんが入らず、市場があまり動かなくなり、米の価格も不安定になっていた。農家もいち経営者。おいしい農産物を作るだけではなく、先を見通して再生産可能なキャッシュフローができるように計画し行動する力が必要だということを学んだ。

冬になり、秋田県は農閑期になったとともに青年部が動き出す。

11月に秋田県の青年部が大集合する青年大会が開催された。大館市以外の若い農家に会うのは初めてだった。この大会のメインイベント『青年の主張』で全県の青年部員が主張発表を行い凌ぎを削った。われわれの青年部の先輩も出場し、見事最優秀賞に選ばれて、東北大会への切符を手に入れた。どの主張にも感銘を受けて、いつか私もこの舞台に立ちたいと思った。

1月は地元の商工会青年部とわれわれ農協青年部が実行委員を務める一大イベント『比内とりの市』に参加した。日本三大美味鶏で大館名産の『比内地鶏』を存分に味わえるイベントだ。

われわれ農協青年部は、比内地鶏を炭火で丸焼きにした通称『千羽焼き』を販売。名前の通り千羽焼ることを目標に長い串に比内地鶏を刺し、炭火の上でじっくり焼いて、行列をなしているお客様に提供していった。

毎年購入してくださる常連のお客さんが大半を占める。初めて見るお客様はその見た目のインパクトに思わず並んでしまったのかもしれない。

さらに農協青年部は、ステージでヒーローに扮して地元の子どもたちに食の大切さを伝えるフードレンジャーショーを行った。子どもたちと一緒にダンスを踊ったり、写真を撮ったりして交流した。

とりの市は地元の方々にとても愛されていて、農協青年部は少しでも地域のために役に立てているんだなと実感した。

それから月日は流れ、私が大館市に来てから5年が経った。

親方は2022年に青年部を卒業した。

毎年青年部員は減少し、周りの農家も営農自体を辞めていく、農家の高齢化と減少を目の当たりにしている。

農家が辞めれば、若い農家や農業法人に農地を預けるが、管理できる面積にも限界がある。いくら技術が進歩したり、機械があるからといって、効率化には限界があり、新たな農業従事者を増やさなければ、根本的な解決策とはならない。

秋田県の新規就農者数は11年連続で年間200人を超えており、5年以内に離農してしまうケースも多い。想像より忙しく、不安定な収入に苦しみ、耐えられず辞めてしまうケースが多いようだ。

農業未経験で生産技術が覚束ないまま経営をして、理想を追い続けた結果行き詰まる姿が目に見える。着実にいち農家、いち経営者になるためには親方となる農家の元で生産技術を学び、農作業に耐えうる身体を作り、農業経営の実態を知ってから経営を始める必要がある。

私はこのような就農形態を『親方就農』と名付けた。

どの業界も未経験でいきなり経営というのはなかなかハードルが高い。農業は補助金があるから一見他の業界よりハードルが低そうに見えるが、一時的な助成であるケースが多いので、ちゃんと経営しなければすぐに破綻してしまう。

だから、親方就農で一から農業を学んで、磐石な経営を築くべきだ。親方就農は親方にとっても農地の扱い手を増やせる良い機会となるため、お互いにメリットのある就農方法だと思う。

私は親方就農の第一フェーズが終わり、来年度から独立する予定である。5年間、親方のもとで農業を手取り、足取り教えて貰い、プロ農家レベルの知識と経験を得ることができた。

次は教えてもらったことを駆使して自らが経営者となり、農業でご飯が食べられる一人前の農家になる。いずれは自らが弟子を迎え入れ、新たな農家を育てられる親方となり、親方就農のモデルを全国に普及させ、農家の減少に歯止めをかける。

農業をやってみたいという人でも安心して始められるような環境を作り、確実に一人前の農家を増やし、日本の食料自給力を高めつつ、地方や農村に活力を見出す。

これが私の『親方就農』で実現したい持続可能な農村社会だ。

プロフィール

谷本 弾 1996年2月 東京都町田市にて誕生。幼少期から野球を始め、現在は社会人球団・石垣ジャイアンツに所属。2020年 母の故郷 秋田県大館市に移住し、現・石垣農園株式会社の代表のもとで農業に勤しむ。